

孟浩然論

——王昌齡・王維・李白との関連において——

鈴木修次

唐の王朝が成立してから約一世紀、王朝の基礎も固まり、王朝文化の最盛期を迎えた時代が、詩史でいうならば盛唐の時期である。盛唐期において中國の詩人は、横溢する人間感情の自由な發散を、個性のおもむきに從つて存分にこころみるのであるが、盛唐的詩風の發端をなす詩人として、孟浩然を考へることができるようになる。孟浩然は、かれの傳記の最も信すべきもの、すなわち、かれの没後その詩二百十八首を集録した友人の王士源の序によれば、開元二十八年（七四〇）に五十二歳をもつて没したといふので、生まれたのは則天武后の永昌元年（中宗の嗣聖六年、六八九）である。孟浩然に續く著名な詩人、そして同時に孟浩然と交際のあつた詩人としては、王昌齡、王維、李白がいる。

王昌齡の傳記は明かでないが、元の辛文房の唐才子傳によれば、開元十五年（七二七）に進士に及第したといふので、生まれたのは八世紀初頭から七世紀の末である。聞一多が唐詩大系において、六九八年に生まれたとしているが、據るところが明かでない。王昌齡と孟浩然と交友があつたことについては、王士源の孟浩然集序に記事があり、一方また孟浩然集に、孟浩然が王昌齡に與えた詩三首を現存させている。王昌齡は、孟浩然より十歳近く、あるいはそれ以上、若年者であつた。王維の生年については、二説が提示されているが、弟の王縉にしろされた正史の傳を信するならば、王縉は七〇〇年に生まれている。したがつて王維は、それ以前に生まれていたと考へねばならず、六九九年出生説に賛同しなければ

ならない。それは孟浩然の出生よりも十年の後である。王維と孟浩然との交友については、王士源の記載にもあるが、五代、王定保の唐摭言卷十一、またこれを利用する新唐書孟浩然傳に、興味ある逸話をしるしている。孟浩然に「留別王維」の詩を現存させ、王維にはまた、「送孟六歸襄陽」「哭孟浩然」の詩を現存させる。孟六とは、孟浩然である。李白は七〇一年の生まれと考えられるので、孟浩然より十二歳若年ということになる。李白は、二十五・六歳ごろから以降、それまで生活していた四川の峨眉山を出て、渝州（重慶）、江陵（荊州）、洞庭湖、漢陽、襄陽、と旅に出るのであるが、襄陽に赴いたとき、當時襄陽の東南の鹿門山に籠つていた孟浩然とつきあいがあつたらしい。孟浩然は後述するごとく、四十歳の年まで鹿門山に隱棲していたのであるが、孟浩然が四十歳の時は、李白は二十八歳であつた。李白の有名な七絶、「黃鶴樓にて孟浩然の廣陵に之くを送る」の詩は、詹鍇の李白詩文繫年の説によれば、李白二十八歳以前の作であると思像する。孟浩然が李白に與えた詩というのは見られないが、李白にはほかに「贈孟浩然」の詩がある。

王昌齡、王維、李白、この三詩人と直接のつきあいを持ち、しかも十歳近く、あるいはそれ以上の年長者として三詩人の尊敬を受けた孟浩然の詩人的性格は、三詩人の上になんらかの投影をもたらさずにはおかなかつたはずである。三詩人に與えた投影ということを考えたとき、盛唐詩壇の先蹤としての孟浩然の位置は、まことに無視できぬものがある。以下の敘述においてわたくしは、まず孟浩然の詩風を考え、次にそれとの比較において他の三詩人を取りあげ、盛唐詩壇のさきがけをなす孟浩然の立場をたしかめたいと思う。

二

孟浩然、字は浩然、襄陽、すなわち今の湖北省襄陽の人である。若いころより節義を好み、よく人の患難を救つた。王士源は序している、

孟浩然、字は浩然、襄陽の人となり。骨貌淑清、風神散朗、患を救ひ紛を釋き、以て義表を立つ。蔬に濯ぎ竹を藝^うゑ、以て高尚を全くす。交游の中、通脫傾蓋、機警^{かく}匿す無し。學は儒を爲さず、務めて菁藻^{ひょうそう}を掇ふ。文は古を按ぜず、

匠心獨妙、五言詩は、天下其の美を盡くすと稱す（矣）。

簡潔な敘述であるが、よく孟浩然の人となりを傳えている。かれは友人の王士源もいうごとく、表面剛腹な性格の人であつたらしい。科擧の試験に熱中するつもりはほとんどなかつたらしく、四十の年までは郷里の鹿門山に隱棲しつつ、その間に諸國を放浪した。なぜ鹿門山に隱棲したかについては、みづから「登鹿門山懷古」と題する五言古詩において語つてゐる。それによれば、鹿門山はかつて漢魏の間にかけての隱者龐徳公が、妻子をたずさえて籠つたところで、孟浩然はその龐徳公の遺風をしたつてここに來たのであるという。

隱棲の間において孟浩然是、湛禪師や、白雲先生を以て稱される王迥といった人ときあつてゐる。しかしながら孟浩然の隱棲は、清らかな孤高を慕つてのそれであつて、佛教や道教の修行のためではなかつた。隱棲はみづからの趣味に發するものだとする口ぶりであるが、しかしはたして心底はどうであつたのであろうか。「年四十にして京師に遊び、進士に應ぜしも第せず、襄陽に還る」と舊唐書の孟浩然の傳にいう。新唐書の説も同様である。四十の年までは、仕官の道を積極的には求めなかつたらしい。

王士源の序にいうように、儒學を爲さなかつたのであれば、科擧に應ずることはまず斷念しなければならない。しかし四十以後のかれの行動を見ると、かならずしも官吏になることに皆目欲がなかつたというのでもなさそうである。それならばなぜ、青年期のかれは、仕官を進んで求めなかつたのであろうか。かれ自身の説明のほかに、さらにもう少しちいつて考えてみなければならぬことがありそうに思う。

孟浩然が生まれたのは、則天武后が稱制をして六年めであつた。張柬之らが舉兵して則天武后の側近である張昌宗らを殺し、中宗が復位し、則天武后が崩じたのは、孟浩然十七歳のときであつた。中宗の皇后韋氏が中宗を毒殺したとき、孟浩然是二十二歳、韋氏を倒して若き日の玄宗が父の睿宗を復位させたのもこの年である。睿宗は、それより二十六年前、六八四年、即位してまもなく、則天武后によつて廢された。孟浩然が二十四歳のとき、玄宗が即位した。すなわちかれの

青年期は、ちやうど唐の王室が權力争いで、紛争しているときであつた。こうした時期に、ある種の氣涯をもつていたかは、權力の所在に少なからず抵抗感を抱くところがあつたのではないか。おしなべて權力が交替するとき、中國においては隱棲の詩人があらわれている。嵇康、阮籍、陶淵明、みなそうであるが、隋唐の間においてはまた王績がいる。そして、初唐から盛唐の過渡期における政治的動亂を背景にして孟浩然があらわれている。

孟浩然が四十の年といえ、玄宗の開元十六年、盛唐の盛時が確實にきざし始めたときである。都に出た孟浩然是、以後、王維と親しくした。また、孟浩然よりも十一歳年長である張九齡にも近づいた。張九齡は開元十九年三月、桂州刺史兼嶺南按察使から中央にもどり、祕書少監に任ぜられ、以後、工部侍郎、檢校中書侍郎、光祿大夫中書令、右丞相の顯職を歴任、開元二十五年四月まで都にあつたので、孟浩然が張九齡に接したのは、四十三歳から以後である。仕官の道に積極的でなかつた孟浩然も、李林甫の勢力をおさえるのに力のあつた張九齡には、ひそかにみずからをかけるところがあつたらしい。張九齡が荊州長史に左遷されたとき、それは開元二十五年四月、孟浩然四十九歳のことであつたが、浩然是張九齡に辟されて従事となつた。しかし間もなくさだかでない理由でその職をやめている。張九齡は、孟浩然と同年に没している。

張九齡のもとを離れて故郷に籠つた孟浩然是、開元二十八年、背に疸を病み、やや快方にむかつたとき、王昌齡が襄陽に遊びにきてともに痛飲し、そのために病氣をふりかえして、五十二歳の生涯を襄陽に終えた、と王士源はしるす。

孟浩然的經歷は、まことに單純である。そしてかれの詩はまた、清澄で、陰鬱なものがない。生來剛強で、一面樂天家であつたので、その作品にもいつこうに暗さをともしなわないのであろうが、しかし心底には、時に複雑なものもかげつていたであらう。かれの詩は、實は、なかなか繊細な一面もある。「高山 安くんぞ仰ぐ可けんや、徒だ此に清芬に搦す」とは、李白の「贈孟浩然」の句であるが、こまやかな神経をもちつつ放逸をもつておしとおした孟浩然是、人間的なある高さをすら感ずる。

孟浩然の感覺のこまやかさを知るてがかりとして、次の詩を讀んでみよう。

朝游訪名山 山遠在空翠 朝に遊びて 名山を訪ふ 山は遠く 空翠に在り

氛氲亘百里 日入行始至 氛氲 百里に亘り 日入りて 行始めて至る

谷口聞鐘聲 林端識香氣 谷口に 鐘聲を聞き 林端に 香氣を知る

杖策尋故人 解鞍暫停騎 策を杖つきて 故人を尋ね 鞍を解きて 暫く騎を停む

石門殊壑險 篳逕轉森邃 石門 殊に壑險 篳逕 轉た森邃

法侶欣相逢 清談曉不寐 法侶 相逢ふを欣び 清談して 曉まで寐ねず

平生慕真隱 累日探靈異 平生 眞隱を慕ひ 累日 靈異を探る

野老朝入田 山僧暮歸寺 野老は 朝に田に入り 山僧は 暮に寺に歸る

松泉多清響 苔壁饒古意 松泉 清響多く 苔壁 古意饒なり

願言投此山 身世兩相弃 願言はくは 此の山に投じ 身と世と 兩ながら相弃てん

(尋香山湛上人)

右の詩は、作品の凝縮度にはややぬるいものがあり、また、孟浩然の作品として特に傑出するというほどのものではないが、孟浩然の感覺の好みは、よく示されている。まず第一に感ずるのは、作品の清澄さであろう。それはまことにからりとすんで清らかである。また、悟りすました詩ではなくて、人間に對する暖かさがある。第二句「空翠」ということが効果がである。「空翠」という用語は、謝靈運、「過白岸亭」の詩に、「空翠強ひて名づけ難し」とあり、孟浩然がくふうした造語ではないが、しかし先人において頻繁に用いられる用語ではない。孟浩然の別の詩、「大禹寺義公禪」にも「夕陽雨足に連なり、空翠庭陰に落つ」とある。王維の「山中」と題する詩にいう「山路元雨無し、空翠人の衣を濕はす」は、むしろ孟浩然を意識するものであろう。第五句、第六句において、音とおいとをとりあげているのも、こまや

かな感覺を感じる。孟浩然の別の詩、「夏日南亭懷辛大」の「荷風香氣を送り、竹露清響を滴らす」も、やはり、音とにおいの對比である。

清澄さ、點景として配された人間に對する暖かき、そして音とかおり、といった要素は、次の作品においても、効果的に示されている。

水亭涼氣多 閑棹晚來過 水亭 涼氣多し 閑棹 晚來過る

澗影見藤竹 潭香聞菱荷 澗影に 藤竹見え 潭香 菱荷聞こゆ

野童扶醉舞 山鳥笑酣歌 野童は 扶へられて醉舞し 山鳥は 笑ひて酣歌す

幽賞未云過 煙光奈多何 幽賞 未だ云に通からず 煙光 夕べを奈何せん

(夏日浮舟過藤逸人別業)

これらの詩を讀んでみると、さながら光と蓮とを、香氣ゆたかに描いた印象派の畫家クロード・モネを思いおこさせる。孟浩然是、一見剛強な生涯に似ず、その作品は、感覺ゆたか、しかも繊細である。音、におい、そして光までも、的確につかまえている。

三

少し先を急いで、他の詩人について論じなければならない。もつとも比較しやすい王維から、先ず考えてみよう。

王維の傳記について述べることは省略するが、孟浩然が都に出て王維と知りあつたその始めの年の開元十六年は、王維二十八歳（一説に三十歳）であつた。高祖父、曾祖父、父が、みな司馬であつた家柄の出である王維は、早くより貴族社會に出入する機會を得、玄宗の弟たる岐王や薛王の宮廷において、すでに詩人としての名聲をうたわれていた。それはまだ二十を前後する歳であつた。少年の時からすでに王維は異才であつたのである。しかしながら王維の詩が、藝術的味わいを示すようになるのは、二十二歳から三十五歳（あるいは三十七歳）の不遇時代の中においてである。その期間に、母

の影響をうけて佛教の信者にもなり、かつ、輞川の別墅をいとなむようになったのであらうと想像されている。^④王維の詩が藝術的深まりを示す時期と、王維が孟浩然と知りあつた時期とは、おおまかにいつてほぼ併行する。

王維がいつごろの時期から、山水自然の描寫に強い興味を示すようになったかは明かでない。王維の山水詩が孟浩然から導かれたかもしれないと考えることは、おそらくは當を得ないであらうが、しかし王維の山水詩には、孟浩然を意識する場合が、たしかにあつたであらう。たとえばすでに示した王維の詩における「空翠」の使用などもその可能性を思わせるが、次の作品なども、また孟浩然の「尋香山湛上人」との類似を思わせる。

谷口疎鍾動 漁樵稍欲稀 谷口に 疎鍾動き 漁樵 稍く稀ならんと欲^す

悠然遠山暮 獨向白雲歸 悠然として 遠山暮れ 獨り 白雲に向ひて歸る

(歸輞川作。律詩の前四句)

孟浩然と王維の詩は、他の詩人たちとくらべたとき、山水自然の詠が多いという點において著しく共通的性格をもつのであるが、しかし一面、孟浩然の詩と王維の詩との間には、性格的に異なるところがある。顯著な相違のひとつは、王維は人物をひややかに點景として扱い、孟浩然の詩に示されたとき人間に對する暖かみがない。たとえば王維はうたう、

相送臨高臺 川原杳何極 相送りて 高臺に臨めば 川原 杳として何ぞ極まらん

日暮飛鳥還 行人去不^あ思 日暮 飛鳥還る 行人 去き思^やまず

(臨高臺、送黎拾遺)

この場合、送られる人である黎拾遺は、「行人」ということばで、まことにひややかにつきはなされている。またたとえば次の詩、

寂寞掩柴扉 蒼茫對落暉 寂寞 柴扉を掩^とし 蒼茫 落暉に對す

鶴巢松樹偏 人訪^あ蕤門稀 鶴は 松樹に巢をなして偏く 人は 蕤門に訪ふこと稀なり

嫩竹含新粉 紅蓮落故衣 嫩竹は 新粉を含み 紅蓮は 故衣を落とす
渡頭燈火起 處處採菱歸 渡頭 燈火起り 處處 採菱歸る

(山居卽事)

ここにとりあげられている、本來にぎやかであるべき採菱の村人たち（おそらくは女たち）も、自然の中に點景として描出されたままで、ひややかにつきはなされている。作者はその群像に對して、人間的な共感をかよわせようとしない。親友裴迪をとりあげた、王維の詩の中ではもつとも人間味を有する次の詩においても、酔つた裴迪は、自然の點景として、距離をおいたところに詠ぜられている。

寒山轉蒼翠 秋水日潺湲 寒山 轉た蒼翠 秋水 日々潺湲

倚杖柴門外 臨風聽暮蟬 杖に倚る 柴門の外 風に臨みて 暮蟬を聽く

渡頭餘落日 墟里上孤烟 渡頭 落日餘り 墟里 孤煙上る

復值接輿醉 狂歌五柳前 復た 接輿の醉に値ふ 狂歌す 五柳の前に

(輞川閑居、贈裴秀才迪)

右の詩は、先に掲げた孟浩然の「夏日浮舟過滕逸人別業」の詩と、類似するものがあるが、孟浩然の「野童扶醉舞」が暖かい人間味をもつて詩の雰囲気にとけこんでいるのに、王維の詩における「接輿」の酔い姿は、客體としてつきはなされているところがある。

孟浩然が、光と音とかおりとをたくみに感覺的に調和させているのに對して、王維の詩には、時に紅と綠、あるいは紅と黒とのあざやかな色彩の對比がある。前掲「山居卽事」の「嫩竹含新粉、紅蓮落故衣」も、綠と紅の對比であるが、ほかにみなお次のような例が求められる。

雨中草色綠堪染 雨中の草色 綠 染む堪く

水上桃花紅欲然

水上の桃花 紅 然えんと欲す

(輞川別業)

孤帆度綠氛 寒浦落紅曠

孤帆 綠氛を度り 寒浦に 紅曠落つ

(下京口埭夜行)

古壁蒼苔黑 寒山遠燒紅

古壁 蒼苔黒く 寒山 遠燒紅なり

(河南嚴尹弟見宿弊廬、訪別入賦十韻)

鰲身映天黑 魚眼射波紅 鰲身 天に映して黒く 魚眼 波を射て紅なり

(送秘書晁監還日本國)

先に掲げた王維の詩に示された「日暮」「落暉」「寒山」「暮蟬」「落日」といったようなすがれた景を示すことば、そしてそうした風景が、王維の一般的好みなのであるが、そうした中にあつて「紅」に對する色彩感覺は、なかなか強烈である。

王維は「空」ということばを格別に好んだ。王維の詩において、「空」という字は九十餘例も用いられている。「吾が生清靜を好む」とは、「東山」と題する詩において王維みずからのべることばであるが、「清」の使用は約六十例、「靜」の使用は二十餘例、そうしたとき「空」字の使用は、きわだつて多いといわなければならない。王維の「空」ということばには、次の例のように、明瞭に佛教と關連させて用いられている場合もある。

欲問義心義 遙知空病空 義心の義を問はんと欲し 遙かに知る 空病の空を

(夏日過青龍寺、謁操禪師)

法向空林說 心隨寶地平 法は 空林に向ひて説き 心は 寶地に隨ひて平かなり

(與蘇廬一員外期遊方丈寺、而蘇不至、因有是作)

一生幾許傷心事　一生幾許^{いくばく}ぞ　傷心の事

不向空門何處銷　空門に向はずんば　何れの處にか銷^きさん

(歎白髮)

もつとも孟浩然においても、次に見るごとく、佛教との関連において「空」を使用する例もある。

談空對樵叟　授法與山精　空を談じて　樵叟に對し　法を授けて　山精に與ふ

(孟浩然、遊明禪師西山蘭若)

會理知無我　觀空厭有形　理に會^きりて　無我を知り　空を觀じて　有形を厭ふ

(孟浩然、陪姚使君題惠上人房)

しかしながら王維にあつては、「空」ということばに、一般的にある種の價值感をとまなわせているようである。山水敘景において使用した「空」という形容においても、王維はそれを、單に感覺的なことばとして用いず、ほとんど聖なる世界の代稱ともいうべき觀念化したことばとして、あるいはまた、ある種の思想をとまなわせたことばとして用いている。

泉聲咽危石　日色冷青松　泉靜　危石に咽び　日色　青松に冷やかなり

薄暮空潭曲　安禪制毒龍　薄暮　空潭の曲　安禪　毒龍を制す

(過香積寺。律詩の後四句)

寂寞柴門人不到　寂寞たる柴門　人　到らず

空林獨與白雲期　空林　獨り　白雲と期す

(早秋山中作)

檀欒映空曲　青翠漾漣漪　檀欒　空曲に映え　青翠　漣漪に漾ふ

暗入南山路　樵人不可知　暗に南山の路に入る　樵人　知る可からず

(輞川集 斤竹嶺)

次の詩における「空山」のイメージも、單にひとけのない山として理解したのでは、なにか残るものがある。その「空山」は、さわやかな光があふれる清らかな山であり、極樂を思わせる清淨な聖なる環境の山でなければならない。王維はこの場合、ほとんど宗教的靜謐を、「空山」の中に感じとつたものであるように思われる。

空山不見人 但聞人語響 空山 人見えず 但だ 人語の響聞こゆ

返景入深林 復照青苔上 返景 深林に入りて 復た 青苔の上を照らす

(輞川集 鹿柴)

王維とつきあいのあつた儲光羲の詩にも、「空山」の使用例は見られるが、その場合の「空山」は、やはり單にひとけのないがらんとした山であつて、それ以外の餘剩の觀念はない。そうしたとき、王維の「空」の感覺には、獨特のものがあつたといわざるをえない。

空山暮雨來 衆鳥意悽悽 空山 暮雨來たり 衆鳥 悽悽を意ふ

(儲光羲、同王十三維偶然作十首其九)

空山足禽獸 墟落多喬木 空山 禽獸足に 墟落 喬木多し

(儲光羲、田家雜興八首其七)

孟浩然の詩をモノの繪にたとえるならば、王維の詩は、印象派を超克しようとするポール・セザンヌのごとき造型性と、觀念化と、計算された抽象美とがあるといえよう。それは、孟浩然に學ぶところがありながらも、みずからの個性の相違を意識して、美の抽象化にさらに一步をふみ出したものである。

四

王昌齡は、孟浩然とはきわめて親交があつたと見られるが、その詩人的性格は、孟浩然とはだいぶ異にする。孟浩然が

五言を得意としたのに對して、王昌齡は七言、とくに七絶に巧みであつたことは、まず詩形の好みからして孟浩然と同じでない。孟浩然において七絶は、わずかに六首求められるのみである。しかも王昌齡は、「長信秋詞」五首の連作や、「西宮春怨」「西宮秋怨」のような穠艷な閨怨の詩に長じた。これは孟浩然にはまったく缺ける才能である。また王昌齡は、邊塞の空想的景物を題材に、すぐれた邊塞詩を作つた。孟浩然にも「涼州詞」をもつてする七律二首があるが、そうした面の能力は、なんといつても王昌齡と比較にならない。

王昌齡という詩人は、まことに多彩な詩人で、閨怨詩の穠艷、邊塞詩の悲涼に加えて、さらに清冽な送別詩にすぐれていた。いといば次のような作品がある。

寒雨連江夜入吳 寒雨 江に連なりて 夜 吳に入る

平明送客楚山孤 平明 客を送れば 楚山 孤なり

洛陽親友如相問 洛陽の親友 如し相問はば

一片冰心在玉壺 一片の冰心は 玉壺に在り

(芙蓉樓送辛漸、其一)

丹陽城南秋海陰 丹陽城南 秋海陰かげり

丹陽城北楚雲深 丹陽城北 楚雲深し

高樓送客不能醉 高樓客を送りて 醉ふ能はず

寂寂寒江明月心 寂寂たる寒江 明月の心

(芙蓉樓送辛漸、其二)

「寒雨連江夜入吳」は、孟浩然のとぼしい七絶の中の次の作品に、やや想を似かよわせるものがある。

荆吳相接水爲鄉 荆吳相接して 水郷と爲る

君去春江正渺茫

君去つて 春江 正に渺茫

日暮征帆泊何處

日暮 征帆 何れの處にか泊する

天涯一望斷人腸

天涯一望 人の腸を斷つ

(孟浩然、送杜十四)

想が似るからといって、王昌齡が孟浩然にならうところがあつたともいえぬ。場合によると、その逆であるかもしれない。ただし清澄な敍景は、孟浩然の長ずるところであつた。景物をとりあげつつ、それを清澄な感傷におとしてゆくところに王昌齡の詩の味わいがあるが、その敍景を利用する清澄さは、やはり孟浩然を意識するところがあつたであらう。王昌齡の送別詩は、上掲の二作品のほか、さらに「送魏二」にしても、「巴陵送李十二」(李十二は、李白)にしても、紙幅の關係上示すのを省くが、いずれも敍景を感傷の表象に轉移させるところがある。孟浩然の「送杜十四」の場合において、そうした傾向がまつたくなとはいえぬが、しかし孟浩然の場合は、敍景はやはり、より直接に敍景であらうとする。それに對して王昌齡の送別詩は、風景描寫の心象描出への轉移があるといえよう。それは山水詩の系列において、新たな藝術的形象をめざすものである。

李白が、孟浩然に何を學び、それをいかに展開させたか。それはむずかしい問題である。李白のように天來の奇才の持ち主は、さまざまの典型、さまざまの刺戟を、たちまちみずから消化し融合させ、形をかえたみずからの想においてエネルギーギッシュにあらわし示す。孟浩然の投影は、李白においてはそのものとしての形骸をとどめない血肉と化しているといわなければならない。しかしながら、そもそも李白がなした放浪をほしきままにする自由な詩人的生活は、孟浩然になつたものであつたにちがいない。李白は、その性格からしても、孟浩然と一脈通ずるものがある。「吾は愛す孟夫子の、風流天下に聞こゆるを」とよんだ李白の「贈孟浩然」の詩は、孟浩然に對する知音の言というべきである。

杜甫は、孟浩然とは直接の關係をもたなかつたが、なお「遣興」の詩において、「吾は憐しむ孟浩然の、短褐長夜に即

くを。詩を賦する何ぞ必ずしも多からんも、往々にして鮑(照)・謝(朓)を凌ぐ。(云云)とのべ、また「解悶」の詩においては、「復た憶ふ 襄陽の孟浩然、清詩句句 盡く傳ふるに堪へたり」(其六)というたう。杜甫「遣興」の孟浩然の理解は、李白の「贈孟浩然」におけるそれに殘念ながら及ばないが、盛唐詩人の先輩としての孟浩然を、尊敬の念をこめつつ稱揚しようとする姿勢は、李白におとらない。

みずからの口からは弱音は吐かなかつたが、その人生において挫折感をも強く味わつたであろう孟浩然(そうした性格は、隋末唐初の王績においてもやはり見られる)は、しかし山水自然を詠ずる詩人として、放浪の自由の中に、獨歩の天地を開いた。そして、先輩としての孟浩然に強く影響されつつ、風物詠を感傷の表象に轉移させ、新たな藝術的形象化をめざすかに見られる王昌齡、また印象の景物を觀念の世界において抽象化し、みごとに造形的世界を構築させた王維とが、次に續く詩人として、盛唐の詩壇を飾つた。孟浩然の一生をつらぬいた詩人の自由は、若い李白に非常な共感を與え、ほとんど孟浩然的自由を信條としつつ、よりいつそう放肆にして自由な詩人、李白が誕生した。盛唐の詩人の出現にあたつて、孟浩然が與えた有形、無形の影響は、まことに無視できぬものがあると考へるのである。

註①王士源については、その孟浩然詩集序にみずからのべ、また、天寶九年、韋滔の孟浩然詩集序にしろる以外、くわしいことはわからない。十八歳より隱者の生活にはいり、著述に、亢倉子がある。

②明の顧起經(玄緯)の類箋王右丞詩集は、則天武后聖曆元年(六九八)出生説をとり、清の趙殿成の王右丞集箋注は、則天武后長安元年(七〇一)出生説をとる。ただし顧起經は年號の數え方に誤りがあり、聖曆二年に生まれたとしなければならぬ。

③王士源の序、新唐書卷二〇三の本傳は、「孟浩然、字は浩然」と明記するが、舊唐書卷一九〇下の本傳、唐才子傳卷二、唐詩紀事卷二三、全唐詩話卷一は、いずれも單に孟浩然というのみで、それがその名であるか、字であるかをいわない。清、沈德潛、唐詩別裁に、「本名浩、字は浩然、字を以て行はる」というが、據るところを知らない。

④小林太一郎「王維の生涯と藝術」の説。

⑤王維の「桃源行」に、「峽裏誰知有人事、世中遙望空雲山」とあり、「寄崇梵僧」詩に、「峽裏誰知有人事、郡中遙望空雲山」という。「空雲山」は、やはり觀念化された聖なる世界である。「桃源行」については、「時年十九」という注があり、若いころから「空」に、ある種の觀念的世界をみていたかと思われる。

(本學助教授)